金石範

口あるものは語れ

이야기하라

金石範

筑摩書房

口あるものは語れ

一九七五年四月五日　初版第一刷発行

著者　金石範（キム ソク ボム）

発行者　井上達三

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替東京四一二三
郵便番号一〇一―九一

印刷　暁印刷
製本　永興舎

©一九七五　金石範

(分類) 0095 (製品) 81062 (出版社) 4604

もくじ

衝撃的な、あまりに衝撃的な——朝鮮統一のための共同声明に接して　7
処刑　11
ある訃報　15
憂鬱な夏　19
犬の遠吠え　23
朴政権とテロリズム　27
沈黙する韓国の民衆　48
恐怖で人間を支配できない　55
「語れ、語れ、ひき裂かれた体で」　59
新しい連帯感を生んだ日　75

許せぬペン代表の詭弁　94
三十年目の八・一五　98
告発を越えるもの　118
距離感　122
ある質問　126
在日朝鮮人における民族的なもの——連帯の主体的条件　130
*
わが虚構を支えるもの——なぜ「済州島」を書くか　146
在日朝鮮人文筆家のことについて　166
文学における〝抵抗〟とは何か　170
済州島四・三事件と李徳九　175

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

消えてしまった歴史　193
偽造された朝鮮史　202
「猪飼野」消滅について　206

昔話　209
ある原稿のこと　212
小さな本　217
『鴉の死』が世に出るまで　221
『1945年夏』の周辺　225
「あとがき」にかえて　229

口あるものは語れ

装幀　田村義也

衝撃的な、あまりに衝撃的な

――朝鮮統一のための共同声明に接して

昨年の夏を、われわれ朝鮮人は衝撃的なくらいの興奮の季節としてすごした。その八月二十日、三十八度線の障壁に決壊の穴をあけはじめた朝鮮南北赤十字の板門店での初接触がもたらした興奮である。それからほぼ一年たったいま、ふたたびわれわれは、少なくとも私は実感のともなわぬくらいのただ驚きとでも形容すべきニュースに接したのである。

七月四日当日の夕刊はどれも「朝鮮の自主統一を促進」とか「〝朝鮮統一〟で共同声明」とか「南北朝鮮、統一の原則合意」などの第一面をつぶしたトップ見出しで私の目を圧倒した。あらかじめテレビでのそのニュースに接していなければ、私は白昼夢の中に突っ立った自分を見つけたかもしれない。

決して、あすあさってにその統一がなるものではないにしても、それは理念としてあったものが、いま強引に地上に引きずりおろされたようなその現実の重量感が、かえって錯覚をもたらす感覚である。びっくりして錯覚するくらいにそれが予測できなかったのかと、笑うものは笑え。光が余りに強烈な場合はわれわれの生の目はくらむものだ。いままさに紙面から跳び出さんばかりのその凸版の字面は、大きな光そのものだった。その隠密的な会談にキッシンジャー的なものを連想する必要もない。いまはただわれわれのまえに姿をあらわした巨大な現実の動きにまともに向かい合えばよい。

それにしても信じがたい。衝撃的というにはすでにあまりにも生々しい歴史の、世界史の中での動きであり、それは衝撃を越えている。

私は朝、友人のKからの電話でそのニュースを知った。Kは、いまふとテレビを見たばかりだが、トップクラスの南北会談が行なわれたとのことだ、かならず十二時のニュースを見たまえという、怠けものの私にはありがたい知らせをくれた。

息をつくまもなくふたたびベルが鳴って、それはKだったがまた電話をかけてきたのだった。やっぱりあのニュースはほんとだった。ウソじゃない。おれはいまテレビ局へ電話をかけてみた。まちがいニュースだって流されることもあるんだから確認してみたが、ほんとだった。南北のトップレベルでもうすでに平壌・ソウル間を相互訪問までしているのだから、これはまちがいない！　うんぬん。Kはよほど信じられなかったにちがいない。あとから私はラジオとテレビでそれを確かめて、Kのいったことを追認した。

もし何も知らずに白紙のままで先刻の夕刊のトップ見出しに接していれば、私は腰をぬかさぬまでも、たしかに目玉の一つくらいはでんぐり返ったかもしれない。南北共同声明は朝鮮人にとってそれほどにも押えきれぬよろこびをもたらせるニュースなのだった。泣きたくさえなる。

なぜそうなのか。思えば、解放後二十数年のあいだ祖国の統一のためのたたかいと挫折の中でどれほど多くの人命が、若い有為の生命がたおれ、虐殺されたことだろう。人間の魂がどれだけそこなわれていったことだろう。その犠牲はあまりにも大きかった。そして統一を待ちくたびれたものの無力感さえときにはなかったわけではない。

われわれ民衆には統一が自分の力を越えたものとして見えたのであり、しかもなお分裂民族の生き

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

る唯一の活路として統一を求めて進まずにはいられなかった。とりわけ南朝鮮の民衆のたたかいの歴史がまさにそれである。

いま南朝鮮の民衆は、祖国の自主的平和統一の声をほっとした思いで、しかもまずはおそるおそる口に出してみるだろう。それは日常いいなれぬ、心の中でつぶやきつづけたことばだった。そしてやがてひろがるその声が全民衆の志となり力となって統一を強く押し進めるだろう。

「共同声明」は統一への大門を開く号砲であるが、統一そのものではない。門の向こうの道はこれから朝鮮人自身の手で拓かれねばならない。外勢にかかわることとしては米軍の撤退や、南朝鮮に進出した日本との関係のことなどもある。

それに南北の対話をはじめながら、一方では反共法や国家非常事態宣言が生きており、多くの祖国統一を主張した人たちが死刑あるいは無期などでいま投獄されたままの事態がある。そしてたとえば詩人金芝河（キムジハ）などの言論人に対する弾圧があるのを忘れてはならない。

いうまでもなく、祖国の統一は単に政治のことではなく人間の存在にかかわることとしてわれわれ自身のまえにある。とくに祖国をはなれた在日朝鮮人にとってはそのことの持つ意義がことのほか大きい。朝鮮の統一がアジアの政治情勢に与える影響はともかく、日本で風化してゆく在日朝鮮人そのものの運命に決定的な作用をするのである。

在日朝鮮人の場合は現実の三十八度線がないのにもかかわらず、そして昨年の八月の南北赤十字接触以後においても民族的な統一を強く押し進めることができなかった。「国境」で分かたれていない在日朝鮮人は統一への前進をなしうる余地を持っているはずなのに、それができなかった。共同声明はこのわれわれの非創造的な姿勢に大きな刺激と力を与えるだろう。

われわれにとって主体的とは「在日」という条件の中で祖国の統一への道に参加することにほかならない。その動きの中で二、三世が大多数を占める在日朝鮮人が、朝鮮民族の一構成部分だということをはっきりさせることができるのであり、つまりそれが少数民族的論議や、二世だからという式の二世論議にも一定の影響を及ぼすことになる。そして総体としての朝鮮人像の中の在日朝鮮人の位置をとらえることに、われわれ自身の動きはまた強力に作用しつづけねばならない。

そして在日朝鮮人のだれもが無条件で南北朝鮮へ自由往来する道が確保される必要がある。朝鮮籍のものが韓国へ、韓国籍のものが北朝鮮へ公然と行けるようになることだ。それは人権の問題としてばかりではなく、祖国統一のためにも大きく作用するものを持つだろう。これは日本政府だけではなく、駐日韓国大使館を持つ南朝鮮側のこれからの英断に待つところが多いといわねばならない。

そのときは私もそれにあやかって、無条件かつ身辺の安全を保障されながら二十数年見ていない、ふるさと済州島やソウルなどを包んだ南朝鮮へ行ってきたいものだ。それはどうやら夢想ではなさそうな気がして、いま私の心をふくらますのである。

（『京都新聞』一九七二年七月一〇日）

処刑

去る七月四日の朝鮮の平和的自主統一をはかるための南北共同声明が発表されてから半月がたった。いまはようやくそのときの興奮が落着き、決して夢ではなく多分に揺るぎない事実としてのその存在感が私の中にできはじめている。昼のテレビ放送の内容を、「朝鮮の自主統一を促進」などと第一面トップ見出しにでかでかと凸版の字面を並べて報じた当日の夕刊でたしかめたとき、それでもなおそれは私を錯覚に引きこむ力を持っていた。「……びっくりして錯覚するくらいにそれを予測できなかったのかと、笑うものは笑え。光が余りに強烈な場合はわれわれの生の眼はくらむものだ。いままさに紙面から跳び出さんばかりのその凸版の字面は大きな光そのものだった……」と、そのとき私は他のところに書いたのだったが、いまはようやくその光に馴れ、それを客観的な事実として目くらむことなく認めうるということだろう。ところでこの定着しはじめた感じはまた裏から見れば、日常性に戻ってゆく馴れの感覚につながるものでもあるようなのだ。

もちろんこの大きな光のもたらす衝撃性はわれわれの中に一種の戸惑いを起こしたのも事実だ。ある人々はそれを頭越しだとか、上からのものだとかともいった。それはまた一面素朴な感情のものといえる。しかしこの「頭越し」の底にあるものを見落してはならない。いくら権力が強大で民衆が無力だと仮定するにしても、その弱い民衆の動向でさえ探らずには存続できぬものとして権力はある。

まして解放後からの南朝鮮における民衆の祖国統一のために血塗られた悲惨なたたかいは、いつか万巻の書によってでもあがなわれねばならぬものとしてある場合は、なおさらだろう。つまりそれが「頭越し」ではあるにしても民衆の主体的な力を否定してはできぬものとしてあったということだ。南北赤十字会談の推進もこの力と無縁ではない。つまり朝鮮の民衆はいままで拱手傍観、無為に昼寝をしていて、急に狂的な興奮で怠惰な支持騒ぎをしだしたのではない。

共同声明以後の南朝鮮の現実は、その表向きの明るさとは裏はらに連日愛国者に対する処刑などの暗いニュースを送ってきた。七月十五日、南朝鮮の地下組織「統一革命党事件」にかかわる元慶南毎日新聞論説委員・金瓆洛（三八）を処刑し、あらたに三人に死刑宣告、二人に無期、残る二十四人に懲役十五年から一年の判決をしたという報道がそれである（『朝日新聞』七二・七・一六）。「問題は処刑の時期である。十三日には日本でも助命運動の起っていた金圭南・元韓国国会議員（四二）が北朝鮮スパイとして死刑になっており、一般の国民は相次ぐ処刑にかなり不安なものを感じている」。処刑だけではない。共同声明のテレビ中継を見ながら「金日成万歳を唱えても、もうつかまえる者はいない」、「人物は金日成が朴正熙よりましだ」、「北が南より良い」などといって、反共法で公務員や靴みがきが逮捕されたというのだが、それに笑いが誘われそうだからこそ、おそろしいニュースだともいうべきだろう。

十三日に処刑された金圭南は去る六月二十九日に大法院で再抗告が棄却され、その死刑が確定したばかりだった。

なぜ権力がその処刑を十三日にしたのか。権力当局は共同声明発表直後から、統一への世論の高まりと、民衆の前向きの姿勢に必死にブレーキをかけながら、これらの愛国者に対する処刑の日をきょ

うか明日かと勘案してきたにちがいない。

共同声明を発表しておいての、民衆に対する「見せしめ」としての処刑の本質は公開死刑と何ら変るところがないが、なぜ権力はその処刑を、たとえば共同声明発表直後の七月五日とか六日にではなく、十三日や十五日に行なったのか。いや、その答えはやさしい。これは却って共同声明の現地に惹き起こしつつある力の一つの証しをわれわれに示してくれるくらいだからだ。それよりも、なぜ彼らはそれを思うままになしうるのかという、人間の名に価する答えを求めることの方がむつかしい。

私は馴れの感覚といったが、それは怠惰な感覚といってもよいのだが、これらの処刑の報道に接したとき、私はすでに自分の中にできていたそれを感じた。新聞の国際欄にその記事を発見しながら、私はそこに自身を戦慄させるまでの感覚的な揺さぶりをおぼえなかった。私は、ああ、やったのかという、半ばあきらめのつぶやきとともに唇を喰いしばった程度なのだった。それはどうともならぬもどかしさのもたらす無力感のせいでもあろうが、いずれにしても私のそれへの反応には新鮮味がなかった。悲しみを、怒りをおぼえぬのではない。処刑台の上で何を思い、何をいい残し、何を叫んだのか想像せぬのでもない。そしてせめて共同声明のことでも正しく、死のまえの彼らに伝えられたのかどうか、考えなかったのでもない。しかし私は身のおきばのないくらいの悲しみと、中天に噴き上げる怒気に支配されたのでもなかった。

もしも処刑が七月五日にでも、つまり共同声明のあの衝撃に打たれた直後にでもあったとすれば（何と私はこうもたやすくかってなことを口にするのだろう！）、私の反応は十三日のそれと、そして十五日のそれともちがっていたのではないかと思う。同じくなす術はなく、そして同じくあきらめしかないにしても、やはり私の心の反応はもっと激しく乱れ、もっと苦しんだと思われるのだ。私はい

まさらその自分を日常性の中に埋れた馴れの感覚のせいだとして、慙愧するつもりはない。ただその処刑を適当にあんばいしながらする権力の遠隔操作なるものに自分の感覚が乗っているようなことを考えるとたまらなくなる。

こうして、その祖国のために求めてたたかったことが共同声明の祖国統一に関する基本原則と合致するものであるにも拘らず、愛国者たちは、いままさにその存廃が問題になりつつあるところの反共法で殺された。それも処刑の日をさえ適当にその目的のためにあんばいする権力者の、人間に対する傲慢な恣意性によってなのだ。

われわれはこの権力の恣意性と同質のものの眼に見えぬ力で、適当に支配されているのではないかという思いに、私はいまひとしお捉えられている。処刑のことに限るのではない。巨大な政治の力はこういう隠微なかたちで人を挫折や無力感の中に徐々に追いこもうとするのだろう。しかし、そうもゆくまい。ほんとうはわれわれとは別のおそろしい無力感が、処刑の日を自在にえらんだその権力側の奥の座深くにこそ、どす黒い色をなして起こっているのかも知れないのだ。

（『展望』一九七二年九月号）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co